

J

5月20日(金) 10:25 ~ 15:50

会議棟 102

第24回 糖化ストレス研究会
～免疫力強化と感染症対策を意識した機能性食品～

主催:糖化ストレス研究会

ifia[®] JAPAN 2022 第27回国際食品素材 / 添加物展・会議
HFE[®] JAPAN 2022 第20回ヘルスフードエキスポ

漢方で感染症からカラダを守る

修琴堂大塚医院 院長、慶應義塾大学医学部漢方医学センター 客員教授、横浜薬科大学特別招聘教授
渡辺賢治

感染症は漢方の得意分野

2019年12月に中国武漢市に端をはした新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は瞬く間に世界に広がった。わが国でも2020年春から流行を繰り返してきた。2022年3月時点でオミクロン株による第6波は少し落ち着きを見せてきたが、新たな変異株の出現は止まらず、楽観は許さない。今では漢方は慢性疾患に用いられる機会が多いが、昭和初期までは、感染症は漢方の主たる治療分野であった。漢方のバイブルである「傷寒論」は後漢末期に竹簡に書かれた書物だが、「傷寒」という消化器感染症（腸チフスと推測されている）の病状変化に対して詳細なる治療法が書かれている。

漢方治療の要諦は生体防御能の強化

漢方の感染症治療は、病原菌を直接攻撃するものではなく、生体の防御能を使って、結果として治癒に導く。感染時における発熱は不快な症状であるが、ウイルス排除のためには重要な生体防御能の一つである。インフルエンザ感染でも子供は高熱を出して短期間で治癒するのに対し、高齢者では無熱のまま肺炎に移行する、などの例をみても、発熱が如何に重要な生体防御能であるかは明白であろう。漢方ではこうした生体反応を後押しするような漢方薬を選択する。新型コロナ感染症に対しては第一波から治療に当たってきたが、概して言えば、体力のある人は高熱を出し、重症化リスクが高いが、治る時はすっきりと治る。体力のない人は高熱が出ないで長引くが、重症化はしない。ただし後遺症が残りやすい傾向がある。

後遺症治療にも漢方は有効

新型コロナ感染症では多彩な後遺症が知られている。長引く咳嗽、嗅覚障害、味覚障害、筋痛性脳脊髄炎/慢性疲労症候群（ME/CFS）などである。これらに対しても漢方治療は効果的である。

新興感染症に漢方を活用する利点

自然環境破壊とグローバル化により、今後も地域で起こった新興感染症が瞬く間に世界中に拡がる懸念されている。こうした新興感染症が起こった時に漢方は治験を経る必要がないので、初期対応が可能であり、ワクチン開発までの時間を稼げる。また、生体防御能を活用するので、インフルエンザ感染か新型コロナ感染かを問わずに早期に治療を行うことで、重症化予防が可能である。生体防御能を引き出すのが主であるから耐性ウイルスを作ることなく、副作用も少ない。今後想定される新興感染症に対して漢方治療をどのように活用すべきかを今から議論しておく必要がある。

略歴

1984年慶應義塾大学医学部卒、医師・医学博士。

慶應義塾大学医学部内科、東海大学医学部免疫学教室、米国スタンフォード大学遺伝学教室、北里研究所(現：北里大学)東洋医学総合研究所、慶應義塾大学医学部漢方医学センター長、慶應義塾大学環境情報学部教授・医学部兼任教授などを経て2019年より現職。

日本内科学会総合内科専門医、日本東洋医学会専門医、WHO国際疾病分類伝統医学委員会共同議長、WHO医学科学諮問委員、日本臨床漢方医会副理事長、漢方産業化推進研究会理事長、神奈川県顧問・奈良県顧問等を兼ねる。